原 著

多言語併用者（琉球方言—日本語標準語—スペイン語）の
失語症例

——標準語での言語治療と回復経過——

中島 悦子¹⁾ 塩田 純一²⁾ 河村 満³⁾

要 約：左被殻出血で失語と右片麻痺を呈した多言語併用例を報告した（55 歳，右利き，男性）。本例は，言語の習得時期，習得環境，言語体系が異なり，琉球方言—日本語標準語—スペイン語併用者と考えられた。血腫除去術後，習得したすべての言語で重度の運動性失語が認められた。言語間の重症度は，従来の言語の習得・使用状況説に加えて脳の損傷部位や失語の病型が関与すると考えられた。本例の発話の回復は，言語治療に用いかつ学校で学んだ標準語で良好であり，妻が使用した母国語の琉球方言や親しんだスペイン語は不良であった。本例は，琉球方言とスペイン語を聴覚的に習得したのに対し，標準語は聴覚とともに日本語の文字として視覚的にも習得している。すなわち本例の言語間の回復の相違は，従来の言語の習得条件，使用状況，心理的要因説に加えて，脳の損傷部位や失語の病型，習得方法が影響を及ぼし，さらに言語治療の有無でも回復に差が生じたと考えられた。

索引用語：多言語併用者，失語症，琉球方言，日本語標準語，スペイン語

Motor Aphasia in a Polylingual Japanese Male

Etsuko Nakajima¹⁾, Junichi Shiota²⁾, Mitsuru Kawamura³⁾

Abstract : A 55-year-old patient developed aphasia and right-sided hemiplegia secondary to a cerebral hemorrhage. The patient was thought to have spoken a Ryukyuan dialect of Japanese, standard Japanese and Spanish. He had acquired these three languages at different stages in life under varying circumstances. After surgical removal of hematoma, he developed severe motor aphasia, losing his ability to use all three languages. The severity of aphasia was considered to vary depending on location of injury of the brain, the type of aphasia, factors known to affect such severity, and the different situations in which he had acquired and used each language. He recovered his ability to speak standard Japanese best, which he had learned at school. Recovery of his mother tongue and of the one most familiar to him differed from the recovery level for standard Japanese. The patient had learned only the spoken forms of Ryukyuan dialect and Spanish, but both

¹⁾ 汐田総合病院言語治療室，²⁾ 同 神経内科：〒 230-0047 横浜市鶴見区下野谷町 4-138

³⁾ 昭和大学神経内科：〒 142-8566 東京都品川区旗の台 1-5-8

¹⁾ Clinic for Speech Disorders, ²⁾ Department of Neurology, Ushioda General Hospital : 4-138 Shitanōya Tsurumi-ki, Yokohama 230-0047

³⁾ Department of Neurology, School of Medicine, Showa University : 1-5-8 Hatanodai, Shinagawa-Ku, Tokyo 142-8566

原稿受理：1998 年 4 月 10 日

spoken and written forms of standard Japanese. Although the course of recovery in such cases has generally been thought to depend on the conditions under which a language was acquired and used and certain psychological factors, this case suggests that recovery also depends on the manner in which the patient originally acquired the language. When a polylingual develops aphasia, recovery is most likely with languages originally acquired in both spoken and written forms.

Key words : polylingual, motor aphasia, Ryukyuan dialect of Japanese, standard Japanese, Spanish

はじめに

二言語 (biligual), 多言語 (polylingual) 併用者の失語症研究は欧米で盛んであり, 失語の症候内容並びにその経過については, 言語の習得時期, 習得環境, 使用状況の影響がみられることが指摘されている^{5,10,11)}。日本では, 日本語を含む二言語, 多言語併用者の失語症報告例は少なく, 日本語とスペイン語併用者の失語は調べた範囲では報告されていない。また, 琉球方言と日本語の標準語併用者の失語例も報告されていない。本論文では, 学校教育で標準語を習得し, 南米移住後独学でスペイン語を習得した琉球方言を常用する男性の失語症例について, その回復過程の検討を呈示する。さらに, 多言語併用者の言語間における失語症状の差と失語症回復の法則についても考察する。

症 例

症 例: 発症時 55 歳, 右利きの男性, 中学校卒, 電気配線工。

主 訴: いいたいことがいえない

既往歴: 53 歳頃高血圧を指摘されたが未治療

家族歴: 父, 母, 弟は脳卒中で死亡

生活歴: 図 1 に本例の言語習得状況を示した。本例は, 1934 年 6 月沖縄本島中部で生まれ, 自発話は幼少より発症まで琉球方言を常用していた。小学校入学時には教師の話す日本語の標準語が全くわからなかった。6 歳より小・中学校で日本語の文字と日本語の標準語発話 (以下, 標準語) を習得し, 標準語は学校でのみ使用していた。読み書きは, 卒業後も日本語の文字を用いていた。

中学卒業後は農作業などを行い, 1958 年アルゼンチン・ブエノスアイレスの父の元へ渡る。父は戦前単身でブラジルに渡り, その後アルゼンチンでクリーニング店を構えた。母と兄は 1951 年に移住した。全員移住に際し外国語教育は受けていない。父はラテン語を, 母と兄はスペイン語をそれぞれ移住してから独学で覚

えた。症例も移住後独学でスペイン語を習得し, 読み書きは簡単な単語のみ可能で, スペイン語会話は洗濯屋やタクシー運転手の仕事で不自由なく使用していた。また沖縄出身者との交流も盛んで, 家庭内外で琉球方言を使用していた。1962 年 28 歳時, 沖縄より妻を迎え結婚。妻も独学でスペイン語を覚えた。子供たちは日本語は話せなかったが日常特に困ることはなかった。1989 年 3 月, 症例夫婦は沖縄出身者とともに帰国, 横浜に住居を構え電気の配線工事に従事した。ここで再度標準語を学習した。しかし近辺に南米から帰国した沖縄出身者が多いことから標準語の使用頻度は少なく, 日常会話はもっぱら琉球方言を使用していた。

現病歴: 1989 年 12 月 1 日, 作業中急に右半身の運動麻痺が出現し, 救急車で近医へ運ばれ脳出血の診断を受けて入院した。翌日, 血腫摘出手術を受け, その後はいずれの言語を用いても意思を伝えることはできず失語が明らかになった。失語症と右片麻痺のリハビリテーションを受けていたが, 1990 年 5 月 9 日, ADL の自立と言語治療を目的に某リハビリテーション病院へ転院した。しかし自発話の表出はほとんどなく, 改善は望めないと診断され 10 月 6 日退院した。1990 年

図 1 本例の言語習得と使用状況。幼少の言語習得期より, 琉球方言を常用している

10月15日、退院後の治療を目的に当院神経内科を受診し、言語治療を開始した。

神経学的所見（発症10ヵ月時）：意識清明，見当識正常，視野障害（対座法）はない。四肢では，右上肢は廃用手だが右下肢は杖歩行が可能な程度の運動麻痺が認められた。また右半身に感覚障害がみられた。失行，失認はみられない。標準語の聴覚性言語理解は比較的保たれていた。発話はいずれの言語を用いても有意味語の表出はみられず，重度の運動性失語が認められた。WAIS-RはPIQ 78（左手使用）であった。

神経放射線学的所見：X線CT（1990年10月29日）で左島から左被殻後部に辺縁鮮明で不整形の低吸収域が認められた。MRI，T2強調画像（1995年4月5日）では，左前頭葉後部皮質から皮質下，被殻，島にかけて高信号域を認めた（図2）。

失語症初回検査（発症11ヵ月時）：自発話は，名前はいえたが非流暢で音の歪みが著しく，琉球方言，標準語，スペイン語のいずれの言語を用いても意思を伝えることはできなかった。物品呼称は，音韻性錯語が顕著で時に意味性錯語がみられたが，20語中標準語，

スペイン語とも3語を正答した。標準語の聴覚性言語理解は比較的保たれていたが，口頭命令に従う課題は語順が入れ替わると誤りが生じた。日本語の文字の読解は文レベルで誤りが生じ，音読は困難であった。書字は，住所，氏名，数字がようやく書ける程度であつ

表1 WABの結果

	1990年11月	1994年6月
情報の内容	2	9
流暢性	2	6
話しことばの理解	7.9	8.1
復唱	3.9	6.6
呼称	2.5	6.5
読み	4.7	7.3
書字	2.9	7.3
失語指数(AQ)	36.6	72.4

当院 WAB 初回検査：1990 年 11 月

—1990年11月— 「これ えー… えー… おさく女性指す>… ここあど
おわ おわ… おかん わかん… えーと これはく男性指す> …これ」

—1991年12月— 「これは べんきょ しています 奥さんは 水を 水を
いでて 水を飲んでます ここにいる いる おか かん かん か たこ
をあげています これから 犬 犬 いぬう きてます あの この…
あの… ここに はた はたが あります」

—1994年6月— 「たこをあげてます 船 船 船 ヨートで… 船を走らせ
ています 本を読んでいます い ジュ ジュースを飲んでます 木 木が
大きい木があります えーと えー えーと これは えー 屋 屋 かや
があります はん 旗があります えーと えー 犬が にゅー 犬がおりま
す ま ま… これはラジオの音 聞いてます」

—1995年12月— 「大きな木があります 男の人は本を見えます 女の人はジュ
ースを飲もうとしています カゴを持ってきました ダジオを持ってきました
た 家があります カラーセがあります 自動車が入っています 国旗をあげ
ています 少年は タコをあげています 犬もいます えー釣り人もいます右
と左 えー 二人ね… ヨートが走っています 手を振っています えー山
がたくさん見えます」

—1995年12月— 琉球方言 「これは 旗 旗 旗 旗 えー 木 木 えー
… いた わて あのね… 犬 犬 い いん あのね これはえーと
あの ふに ふに 船 えーと これは に にーせ にーせが いゆる
た たくに うーたつて 風上げ えーこれは あの これは これ とら
トラック さい さい これは いに 自動車 う うで あのね これ
は いぬ い いな になぐた になぐちゃです これはダジオ」

—1995年12月— スペイン語 「… あのね これはね… これペロ ペーロ
ヨート あのね… シ ジーニョール セーニョール セーニョールあの
セーニョーラ コーチ コーチ う 家… 旗 マンネーダ… これは あの
わからない キール わからん… 木 木 木 わから わからない
木 ダジオ ダジオ… リルボ リプロ リプロ ミナ リブル ミナード
これはジュース トマト トマト トマト… めん めん 港」

参：琉球方言：チクワ、犬イン、船フニ、青年ニセ、浜に寄せる高波ニナグイ、
スペイン語：犬perro、ヨットyate、氏senor、婦人senora、自動車coche、
旗bandera、犬かquilco、本el libro、夫el marido、取るtomador。

図3 WAB 絵画説明。初回検査では有意味語の表出はみられなかったが，訓練が進むにつれ標準語では人・物・行為の喚語能力と表現に改善がみられる。他の二言語ではいくつかの人・物などが喚語される程度であった

図2 MRI，T2強調画像（1995年4月5日）。左前頭葉後部皮質から皮質下，被殻，島にかけて高信号域が認められる

た。WAB失語指数はAQ 36.6と重度のブローカ失語を示した(表1)。図3に絵画説明での自発話の実例を示す。有意味語の表出は全くみられない。

言語治療:発話の改善を計ることを訓練の目的とした。開始にあたり、患者は現在日本に居住しアルゼンチンへ再移住する可能性がないこと、誰にでもわかることばを話すこと、から標準語で言語治療を行うことにした。方法は、①全般的な発話の改善を目的として、呼称・復唱・音読などの練習を行った。②喚語困難時の迂回路(自発書字→音読→発話の表出回路)の強化を目的として、写字・書き取りの練習を行った。③自由会話での発話増進を目的として、会話文の音読とその自発化の練習を行った。これらをいずれも改善状況

図4 100単語の呼称と書き取り検査。呼称・書き取りともに、訓練に用いた言語(日本語)で改善がみられる

に応じて難易度を上げていく一方、家庭で復習させた。訓練期間は、発症1年後から週1回現在に至るまで行った。

経過:100語検査では、標準語は訓練経過とともに改善傾向を示したが、琉球方言やスペイン語は困難であった(図4)。訓練開始6ヵ月頃から行った動作絵の説明課題は、喚語困難が生じた際に自発的に日本語で名詞単語を書き、それを音読しながら説明したり、名詞部分が他の言語に置き換わることがあった(図5)。標準語での自由会話は、紋切り型の挨拶につづき、電文体発話が出現、その頃になると発話量は徐々に増加した(図6)。しかし日常、妻の話しかけ(琉球方言にスペイン語が混在)に対する応答は標準語が主体であり、他の二言語の表出はまれであった。さらに本例と同じ言語環境下にあった男性との自由会話場面でも、三言語でそれぞれ話しかけてもらったが、いずれの場合も標準語が主体であり、言語の選択に異常をきたした。このような他の言語の混入した発話は出現頻度に減少がみられたもののしばらくの間続き、視覚的手がかりのある課題と自由会話に乖離がみられ、全体として会話の障害が顕著であった。

WABでは(表1)、標準語の自発話は徐々に音の歪みも軽減し、情報の内容、流暢性とも改善が顕著であった。絵画説明(表2、図3)は、内容も多彩で文レベルで表現できるようになった。しかし琉球方言やスペイン語の自発話は単語の表出がやっとであり、それらも標準語で話し出さなければ困難であった。話し言葉の理解は、標準語の改善に比べ他の二言語では継時的命令に従うことはできなかった。書字は、日本語は表現できるようになったが、スペイン語は名前も書けなかった。

以上のように言語の各モダリティは、訓練で用いた標準語の音声言語と日本語の文字言語で改善が認められた。

(1991年6月末)

動作絵	発話例		
	名詞	助詞	動詞
ネクタイを絞める	ゴルバッタ	を	しめる (la corbata)
壁を塗る	パレー	を	ぬる (la pared)
おもちゃを落とす	フゲッテ	を	おとした (el juguete)
ワイシャツを洗う	カミーサ	を	あらう (la camisa)

図5 言語間の混乱例。標準語での動作絵説明中、喚語困難時に標準語の名詞に対応するスペイン語が混入することもあり、言語の使い分け、選択に混乱が生じた。カッコ内はスペイン語。

<1991年9月>
 (おはようございます)「先生 おはよう ございます よろしく おねがいします」 (今日はいかがですか?)「はい きょうは わるい よい よいてんきです」 (お体の具合はいかがですか?)「まーまーです」 (リハビリは?)「・・・ニハ ニハ ニ リ リハリビに いてて きました」 (何をしました?)「・・・うんどう うんどうです うんどうしてきました」 (昨日の台風は大丈夫でしたか?)「・・・あみ かぜ ふ ふーています」 参. 雨=アミ

<1991年12月>
 (アルゼンチンのクリスマスは?)「・・・クリス 20 25 にちまあ えーとおなじです」 (どんなクリスマスなの?)「・・・こう たくたん ごみだ・・・ たんくさん こ ごみ こ ごちそう つくる・・・なみだため・・・ 24 にち えーと 24にち だみだの 24にち・・・ なみだ あどこの 24にちです・・・えー はなび かね ならす 24にち」 参クリスマス=la Navidad

<1993年9月>
 (また台風が来るそうですね)「それは 東京 神奈川・・・ えーと・・・ きないんだ 東京 神奈川 曲がって行ったの 明日来るんですが かこ かごしまあー みんな あわ いつも あそこに行くんです」 (沖縄での台風の経験は?)「風 もう みんな かーや やねも・・・もー・・・た た 倒れたのかーやのやね」 (屋根)「うん 今は 僕達がいた時は か コンクリート・・・」 (補助は出るの?)「国から なん なん 何十年 貸すんです」 (朝食は何を食べましたか?)「パンとクリームをちょっと付けて食べたんです パンはバター バター これを これくらい 水 水 えー にゅーにゅーを えー 牛乳を飲んだんです」

図6 自由会話例. 標準語では、紋切り型の挨拶から徐々に発語数が増加し、表現も良好となっている。音韻性錯語はスペイン語や琉球方言と思われる発語でもみられる

表2 WAB 絵画説明

	訓練前		訓練 5 年後		
	(語)	文	(名詞 動詞 その他)		
琉球方言	0	0	4	1	0
標準語	0	18	(21	23	39)
スペイン語	0	0	9	2	0

訓練前は有意味語の表出は全くみられなかったが、訓練後は標準語のみ文レベルの表現が可能となり、品詞内訳でも平均して出現している。

考 察

1. 本例の言語習得状況と言語間における失語の重症度

多言語併用者の失語症を検討するにあたり、永渕ら⁶⁾は、「bilingual の定義は人によって異なる」とした上で「過去 (学童期以上) において、外国語を日常生活 (国内または外国) で不自由なく使用できる状態になっていた人」としている。綿森ら¹²⁾は、「2 ヵ国語以上を話す」とし、渡辺ら¹⁴⁾は、博言家の失語例で「博言家 (多言語習得者) すなわち 2 ヵ国語 (bilingual) ないし、数ヵ国語 (polyglot) に堪能な人」としている。二言語、多言語併用者の語学力については、日常不自由なく使用できる程度から堪能までその条件はさまざまである。本例は、「ある期間、多言語を日常不自由な

く話した」失語症者である。

多言語併用者の失語症では、言語間における失語症状の差や回復の差を検討する上で言語の習得時期や習得環境が重要視されている。Osgood と Miron⁸⁾は、「時間的、環境的に同じ情況下で 2 つの記号体系を等価なものとして習得する場合を compound type、時間的、環境的に異なった情況下で 2 つの記号体系を習得する場合を coordinate type」に分けている¹³⁾。また「ある言語を通して他の言語を習得する Subordinate type」を含める研究者もいる⁷⁾。

本例は、沖縄本島中部の農村の出身であり、はじめに習得した話しことばは出生地の公用語で標準的な琉球方言である。標準語は、言語発達期の中～後期に学校教育の場で書きことば (文字言語) とともに話しことば (音声言語) として学習した。しかし授業を除く日常生活では琉球方言を使用していた。

沖縄での標準語の取り入れは、歴史的には明治時代移民先で沖縄出身者が孤立していたことに端を発し、戦後の定着まで長い時間を要している。標準語と琉球方言 (沖縄語) の差は、言語学的には日本語の他の本土方言と異なり、英語とドイツ語程の違いがあるという。標準語が 5 母音「あ、い、う、え、お」であるのに対して、琉球方言は 3 母音「あ、い、う」である。両「アミ」、風「カジ」、雲「クム」など、母音音素が置換したものと、太陽「ティーダ」、父「ターリー」、足「フィサ」、おはようございます「ニフェデービル」、さようなら「ンジチャービラ」など母音の置換にとどまらないことばがある。現在でも琉球方言を話す人々は、本土方言の大和言葉に対し琉球方言を「ウチナーグチ」と呼んでいる。一国家一言語の考え方から、琉球方言は日本語の方言とされてはいるが、このような相違からか沖縄語として一言語の立場をとる研究者もあり、言語学上も図 7 のように異なる体系とされている¹⁰⁾。さらに琉球方言はいくつかの方言に分かれ、沖縄本島は琉球方言の中でも標準語といわれる沖縄方言に分類されている。しかし実際の使用面では、歴史的背景とは別に個人差が窺えたため本例の言語環境を適切に知る必要性があった。本院近辺は比較的沖縄出身者が多く、また南米移住経験者も多い特殊な土地柄であり、町中で琉球方言を耳にすることがある。そこで沖縄出身者および南米移住経験者から情報を集めた。沖縄本島都市部の出身で横浜在住の本例と同年齢の人々の場合、幼少時すでに標準語が公用語になっており琉球方言を話すことはできない。しかしそれら兄や姉の年齢以上の人では現在も琉球方言を話すことができた。本例の 5 歳年下の妻をはじめとする農村出身者は

図7 日本語の体系(外間守善, 1981).「琉球方言は、他の本土方言と言語学的に異なる言語体系」にあることを示す図

幼少時琉球方言で育ったという。このように当時、都市部での標準語の流布や学校教育とは異なり、農村や高齢者では依然として公用語は琉球方言であったようで、琉球方言が禁じられていたとはいえ、沖縄県内でも地域や年齢の違いで言語環境が異なっていた。さらに南米移住経験者では、沖縄出身者間の公用語は琉球方言であり、現在でも帰国後琉球方言を常用する人が多い。これら言語学的、歴史的、環境的相違点や標準語の学習、使用状況からみて、本例にとって琉球方言と標準語は異なる言語と考えられた。すなわち標準語は coordinate type の第2の言語と考えられる。

スペイン語は、24歳で移住してから独学で習得した。すなわち本例の言語習得時期は、琉球方言は幼少期から、標準語は学童期、スペイン語は青年期であり時間的に異なる。次に言語習得環境は、琉球方言は出生地の自然な環境下、標準語は学校教育の強制的な閉鎖環境、スペイン語は琉球方言を常用する沖縄出身者の多い特殊な環境であり、言語的、心理的、地理的に異なる。

以上、言語体系、言語習得時期、言語習得環境の相違から、本例は琉球方言を母国語とする、琉球方言—日本語標準語—スペイン語の coordinate type の多言語併用者と考えられた。

二言語併用者の言語間の失語の重症度について、

Lambert と Fillembaum⁹⁾は、言語習得状況が compound type では2つの言語が同程度に障害され、coordinate type ではいずれか一方がより重度に障害される可能性を指摘している。本例は、左被殻血腫除去術後から本院初診時まで、いずれの言語を用いても意思を伝えることはできなかった。検査は聴覚性言語理解、読み書き、復唱は標準語で行っており言語間の相違は不明であるが、発話面は習得したすべての言語において重度の運動性失語を呈していた。すなわち本例は、言語の習得時期、習得環境の異なる多言語を併用していた失語症者であるにも関わらず、言語間に差はみられずいずれの言語も重度に障害され、Lambert と Fillembaum の説と異なった。これら三つの言語は左脳の病変によって同程度の失語症状が生じたことから、言語習得は脳の側性になされたと考えられる。重度の運動性失語の場合は、発話の非流暢さに加えて音の産生自体が困難となる。したがって、従来の Lambert と Fillembaum の説の一方、側性に習得された多言語併用者の場合、重度の運動性失語ないしは全失語では広範な損傷部位が疑われるため言語間に差は生じず、すべての言語で同程度の障害が出現する可能性が考えられた。すなわち言語間の失語の重症度は、言語習得の側性化状況に加えて、脳の損傷部位や失語の病型が関与すると考えられた。

2. 本例の失語症状と回復経過

本例の失語症状の経過はおおむね次の通りである。訓練前には、習得したすべての言語で重度の喚語困難がみられた。表出できた発話は非流暢かつ音韻性錯語が顕著であり、呼称は標準語とスペイン語がまれにみられた。標準語の聴覚性言語理解と日本語の読解は中等度の障害であったが、書字の表現は困難であった。訓練中は、標準語の呼称から改善がはじまり、徐々に文で動作絵が説明ができるようになったが、会話場面での発話は少なかった。標準語に他の言語が単語レベルで混入することもあった。発話に比べて日本語の書字で改善が良好となる時期もあった。訓練開始5年後には、標準語のすべてのモダリティで改善がみられ、プロソディーの障害や音の歪みも軽減した。

欧米での二言語、多言語併用者の失語症回復の法則では、Ribot¹¹⁾は「母国語の回復が良好である」と説き、Pitres¹⁰⁾は「最も親しんだ言語から回復する」とし、Mincowski⁹⁾は「感情的要因の強い言語ほど回復が早い」と述べている。また Paradise⁹⁾は、二言語併用者の失語の回復過程として、同時に回復するタイプ(parallel type)、一方の言語が遅れて回復するタイプ(differential type)、二つ目の言語の回復に伴い初めの言語が

後退するタイプ (antagonistic type), 一つの言語が回復したのちもう一つの言語が回復するタイプ (successive type), 一つの言語のみ回復するタイプ (selective type), 言語間に干渉が生じるタイプ (mixed type) の 6 通りを上げている¹³⁾。

本例の言語使用状況は, 移住前は琉球方言を常用し必要に応じて標準語を使用していた。移住時代は琉球方言を使用するとともにスペイン語にも 30 年間親しんでおり, 標準語の使用はまれであった。帰国後は標準語圏ではあったが琉球方言が最も多く, 次いでスペイン語, 標準語の順で使用していた。発症後の言語環境は, 妻の琉球方言やスペイン語であり, 標準語は日常のテレビと週 1 回の言語治療が主であった。このような点から日本語の文字言語を除き, 言語習得開始から現在までの音声言語の親密度と使用頻度は, 琉球方言, スペイン語, 標準語の順であり, 標準語は他の言語に比べて特に親しみのある言語とはいいがたい。また本例は温厚な性格で蛇味線の名手である。喜びや悲しみの時にはいつも琉球の歌謡があり, 愛を語りあったのも琉球方言である。これらの点からみても, 強制的に教えられたとはいえ標準語が特に感情的要因が大きかったとは考えにくい。それにも関わらず改善した言語は標準語であり, 呼称, 動作絵の説明, 自由会話というように単語レベルから文, 複文レベルへ, かつ視覚的手がかりのある課題から自由場面へ改善の経過をたどっている。一方, 文字言語は日本語は読み書きとも単語レベルから改善し, 仮名一文字, 文レベルへと改善していったが, スペイン語は困難であった。すなわち本例の失語の回復した言語は, 母国語でも慣れ親しんだ言語でも感情的要因の強い言語でもなく, 学校教育で音声言語と文字言語を同時に学んだ言語で認められたことになり, Ribot や Pitres や Mincowski の失語症回復の法則とは異なる。

また Albert¹⁾は, 言語間の使い分け, すなわち switch mechanism 機能の局在を左縁状回・角回と考えている。本例の病変は, 左被殻を中心とした部位であり, 左縁状回・角回に損傷はみられない。しかし本例では, 標準語の回復過程で訓練初期から他の言語が混入し, 言語の使い分けで時折混乱が生じた。そしてその言語の違いを認識していなかった。また訓練開始 5 年後からは他の二言語でも若干の改善がみられている。このような点から本例の失語症の回復経過は Paradise の分類中, 言語間に干渉が生じる mixed type と他の言語が遅れて回復する differential type を合併した回復過程をたどっているものと考えられた。さらに本例は, 音声言語の回復過程で文字言語の回復が先行

する時期もみられたことから, 音声言語の回復に文字訓練が有効と思われた。

二言語, 多言語併用者の失語の文字言語に関する記載のうち^{3,5,6,12)}, Minkowski⁵⁾は, 言語がどのように習得されたか, すなわち話しことばとして習得したのか書きことばかが回復にとって重要な要因となることを指摘している。また永瀬ら⁶⁾は, 二言語併用者の失語例で文字を習得した言語に改善がみられた例を報告している。

本例に施行した訓練前の失語症検査は, 標準語によるものであり, 他の二言語は施行していない。標準語による WAB の最終検査では各モダリティで改善が認められた。その際行った他の二言語による自発話, 話し言葉の理解, 復唱, 呼称の検査ではわずかに改善がみられた。すなわち妻の日常の刺激語である琉球方言とスペイン語は標準語の回復に比べて不良であったことになる。本例は, 琉球方言とスペイン語は話しことばとして聴覚的に習得した。一方, 標準語は文字を同時に学び視覚的にも習得している。読み書きは, 日本語の構文に従って行ってきた。標準語の改善は, こうした習得段階の文字言語での思考要素が根底にあり, テレビでの視覚的な文字刺激や言語治療, かつ文字中枢の損傷を免れたことが書字の改善となり, さらに自然回復に伴い, 発話面の改善につながったのではないかと考えられた。

すなわち, 多言語を併用していた本例の言語間の回復の相違は, 従来の言語習得条件, 使用状況, 心理的要因によるものとする説に加えて, 言語習得段階における習得方法 (音声言語とともに文字言語を同時に学ぶなど) が影響を及ぼしたものと考えられ, Mincowski⁵⁾の習得方法説を支持するものである。さらに失語の回復は, 脳の損傷部位や失語の病型, 言語治療の有無が言語間の回復を左右する可能性が高いと考えられた。

本論文を発表するにあたり, 患者ご自身とご家族のご了承を得たことを付記するとともに, ご両者に対して謹んで御礼申し上げます。

本論文の要旨は第 41 回日本音声言語医学会において発表した。

文 献

- 1) Albert, M.L., Obler, L.K. : The bilingual brain. Neuropsychological and neurolinguistic aspects of bilingualism. Academic Press, New York, 1978.

- 2) 外間守善：沖縄の言葉。日本語の世界 9，中央公論社，1981.
- 3) 木島理恵子，吉野真里子，河村 満，他：日本語・韓国語二言語使用者失語症例の検討：漢字・仮名・漢字・ハングルの対比を中心に。失語症研究，17：1-9，1997.
- 4) Lambert, W.E., Fillembaum, S. : A pilot study of aphasia among Bilinguals. Canaduan J. Psychol., 13 : 28-34, 1959.
- 5) Mincowski, M. : Klinischer Beitrag zur Ahpasi e bei Polyglotten, speziell im Hinblick aufs Schweizerdeutsche. Schweiz. Arch. Neurol. Psychiat., 21 ; 43-72, 1927. [渡辺俊三訳：神経心理学の源流，第一部失語編，秋元波留夫他監修，創造出版，東京。（出版予定）]
- 6) 永瀧正昭，紀 朝栄，笹生俊一，他：中国残留孤児の失語症。失語症研究，10：183-190，1990.
- 7) 大橋博司：神経心理学の最近の話題から一二言語併用と失語をめぐって一。臨床精神医学，8；1173-1180，1979.
- 8) Osgood, C.E., Miron, M.S. (Eds.) : Aproaches to the study of ahpasia. Chicago : Univ. of Illinois Press, 1963.
- 9) Paradice, M., Godblum, M.C., Abidi, R. : Alternate antagonism with paradoxical translation behavior in two bilingual ahpasic patients. Brain & Language, 15 ; 55-69, 1982.
- 10) Pitres. A. : Etude sur l, ahpasic chez les polyglottes. Rev. Med., 15 : 873-899, 1895. [渡辺俊三訳：博言家の失語症の研究。精神医学，22；967-975. 1101-1109, 1980.]
- 11) Ribot, T. : Les maladies de la memoire. Bailliere. Paris, 1881.
- 12) 綿森淑子，笹沼澄子：Bilingual 失語症 2 例の言語治療経過。脳と神経，28；77-85. 1976.
- 13) 渡辺 象，上嶋権兵衛，鈴木美智子，他：日本語一英語を主とした多国語習得者の失語症の一例。失語症研究，10：217-223，1990.
- 14) 渡辺俊三，田崎博一，北条 敬，他：博言家の失語症について一神経心理学的考察一。神経進歩，26；563-571，1982.

別刷請求先：〒 230-0047 横浜市鶴見区下野谷町 4-138

汐田総合病院言語治療室

中島悦子